

グリーンツーリズムによる農村地域の活性化

－青森県旧尾上町を例に－

篠原 奈緒

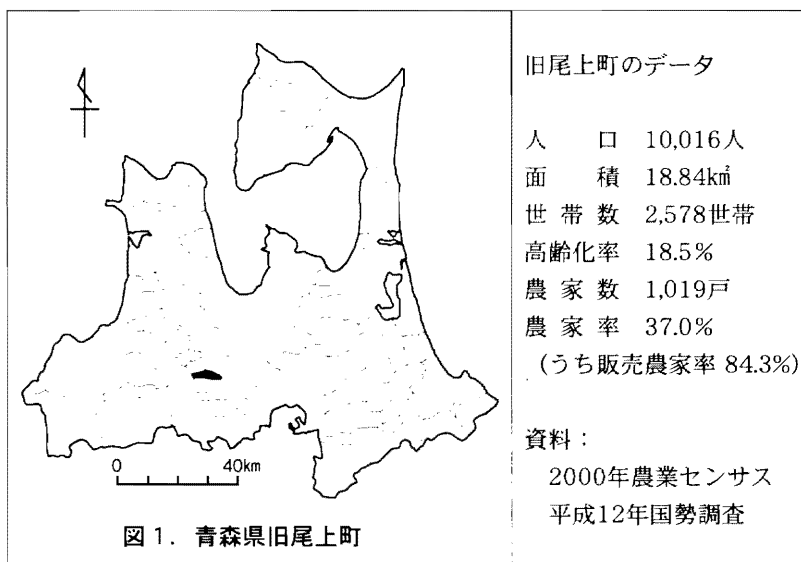
I. はじめに

現在、日本の多くの農村地域が都市への人口流出による人口減少、少子・高齢化、農家の後継者不足、財政難など多くの課題を抱えているが、その結果、農村地域の基幹産業である農業が衰退し、農村地域全体の経済が不活発になっている。近年このような事態を打開するための一方策として「グリーンツーリズム」が注目され、全国の農山漁村で取り組みが行われている。グリーンツーリズムとは緑豊かな農村地域において、その自然・文化・人々との交流を楽しむ、滞在型の余暇活動のことである。具体的には、都市部に住む人が農山漁村を訪れ、農作業、農産物の収穫、地域の行事や祭りへの参加、農家民宿への宿泊などを体験し、その景観を満喫して心身ともにリフレッシュする、新しいタイプのレジャーである。活動の内容はさまざまであるが青森県内でもほぼ全域で行われている。

青森県南津軽郡旧尾上町（現平川市）で行われているグリーンツーリズムは町の特徴がよく活かされていて興味深い。そこで本稿ではこの旧尾上町のグリーンツーリズムが農村地域の活性化にどのような影響をおよぼしているのかについて経済面、人的交流、地域住民の意識の3つの観点から考察し、今後の展開についていくつかの提言を試みたい。

II. 研究対象地域の概要

尾上町は平成18年1月1日をもって平賀町、碓ヶ関村と合併して平川市になった。基幹産業はリンゴと米を中心とした農業であるが、花卉栽培や豆類、トマトの栽培も行われている。東西に細長い形をしているが、大きな起伏はなく平坦な土地である。可住地面積比率は99.0%と非常に高い



耕地面積も1,320haと70%超で全国平均を大きく上回る。総人口に占める農家人口の割合は、1990年に55.1%、1995年に49.7%、2000年に45.0%となっており、確実に減少している（2000年農業センサス）。また、基幹的農業従事者数は907人で、うち65歳未満は53%の483人とどまっている。

尾上町の景観

尾上町には現在339棟の農家蔵がある。農家蔵とは農家が農作物を保存したり、家財道具を保管したりするのに使用した土壁の蔵で、多くは昭和20年代から30年代に建てられたものである。またさわらの生け垣も多く、蔵とともに独特の景観をつくりだしており、旧尾上町は「ふるさと尾上町の生け垣を守り育てる条例」を制定し保護・保全に取り組んでいる。さらに、「庭（つぼ）」とよばれる農家庭園が多く残っており、庭園文化が浸透した町として知られている。以上の3つの要素が尾上町独特の景観を作り上げている。

特に蔵の集中している「金屋地区」の蔵22棟が平成17年9月16日に国指定の文化財に登録された。

Ⅲ. 活動の主体

尾上町のグリーンツーリズムの主体は、NPO法人尾上町蔵保存利活用促進会である。この団体は1996年から活動を開始し、2002年にNPO法人認証を受けた。当初の会員数は25名であったが、現在は50名に増えている。蔵の保存と利活用促進を推進する組織の必要性から設立されたが、現在は、蔵の保存と利活用の推進だけでなく、地域環境保全、さらにツーリズム農業の定着のために活動している。中心的人物は現事務局長の佐藤正彦さんである。農協時代からこれからの農村はグリーンツーリズムで町おこしをしていく必要があるという認識を持ち、さらに尾上だけの特色として農家蔵を中心とした活動を打ち出した。平成17年に農家蔵22棟が国の文化財指定に至ったのもNPOの地道な活動があってこそである。このほかにも、農林水産省主催第3回「村の伝統文化顕彰」農村振興局長賞、総務省主催16年度「地域振興」総務大臣賞、地域づくり団体全国協議会主催17年度「地域づくり誌コンテスト」優秀賞などの受賞歴がある。

Ⅳ. グリーンツーリズムの活動内容

大きく分けると2つのパターンに分けられる。

ひとつは蔵・庭めぐり+農家民宿をして農作業体験をするもの、もうひとつは農作業体験+蔵・庭園めぐりをするもの、である。前者に当てはまる特に人数規模の大きいものは5月・6月の都市部の中学生の修学旅行受け入れて、3泊4日の修学旅行のうちの1泊を農家民宿で過ごす。平成16年度は千葉県から1校、北海道から2校、あわせて3校の受け入れをしている。内容は、蔵・農家庭園ウォッチングをして、各受け入れ農家ごとに分かれて農作業を体験し、農家のお宅に1

泊する（農家民宿）というものが多い。ただ農作業をするだけでなく、蔵と庭を見学するというメニューが加わっているのが尾上の特色を生かした部分である。受け入れ農家1軒に対して生徒の人数は3人から5人程度の場合が多い。農作業の内容やその他の農村体験の内容は各農家に任されている。そこで生徒たちはそれぞれ全く異なる体験をしていくことになる。尾上町で受け入れられる人数は200人に満たない。そのため許容人数以上を受け入れる際は津軽ほっとステイネットワーク^(注)を利用して周辺市町村の受け入れ農家に協力をしてもらう。

V. 調査結果

金銭面についてはNPOの事務局長佐藤正彦さんからの聞き取りを中心にしている。

人的交流については、平成15年度に弘前大学農学生命科学部の谷口建教授が受け入れた中学生を対象に実施したアンケート結果を使わせていただいた。

地域住民の意識については、尾上町立尾上中学校の全生徒およびご家族を対象に平成17年12月12日から19日の1週間、留め置き法にてアンケートを実施した。回収率は72.6%である。

1) 経済面

1) NPOの財源

NPOの財源は多くを補助金や助成金に依存している。たとえば平成15・16年の補助金の受給状況は以下のようである。

組織名	事業名	金額
財団法人 青森県市町村振興協会	地域づくり推進ソフト事業助成	平成15年度 1,220,000円 平成16年度 99,750円
財団法人 むつ小川原地域産業振興団	むつ小川原地域産業振興 プロジェクト支援助成	平成15年度 1,257,000円 平成16年度 1,300,000円

一方自主財源は平成15年が1,428,000円、平成16年が625,000円である。財源全体に占める助成金の割合が高いことがわかる。地域資源を生かし、地域に根ざした活動をしているのにも関わらず、活動資金は地域外からもたらされているのである。非常に残念なことであるが、発足してまだ日の浅い団体であり自主財源が確保できていないことが原因だと考えられる。

2) 地域経済への影響

グリーンツーリズムの目的のひとつに、地元の経済の活性化がある。いまのところ受け入れ人数がそれほど多くないため、目立った波及効果は認められないが、修学旅行で引率の先生が尾上町の宿泊施設を利用する、受け入れ農家と一緒に温泉に行く生徒が多い、お土産を買う、など確実に消費活動は行われている。しかし現在の受け入れ人数では町内の経済活動に大きく影響を与えるものではない。

受け入れをすることで収入があるということは農家にとって大きなプラス要素であるのだが、

ビジネス感覚ではないため生徒にお金をかけすぎていることを指摘したい。農村の生活、農家の生活を体験しに来ているので、普段通りの食生活をさせるように申し合わせをしているのだが、晩ご飯にバーベキューなどワンランク上の食事をする家庭が少なからずあり、散財につながっている。普段通りの食生活を体験させることも生徒にとっては貴重な体験であり、そうすることで受け入れ農家の収入が増えるということを理解してもらいたい。

3) 人的交流の面

グリーンツーリズムの最大のメリットは、都市部と農村部の人々の交流が生まれることである。ここでは平成16年に尾上町を含む青森県の農村（弘前、岩木、平賀、浪岡）に修学旅行の一環として訪れた千葉県の中학생へのアンケート結果をもとに考察したい。

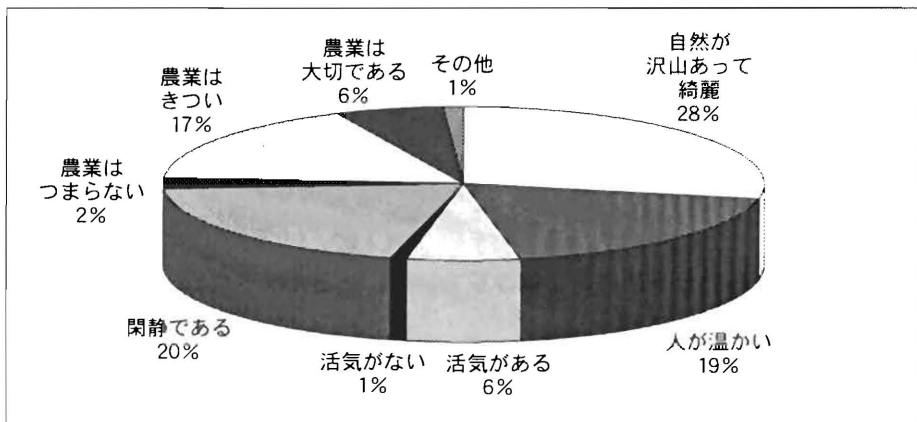


図2. 青森に行く前に抱いていた農業・農村に対するイメージ

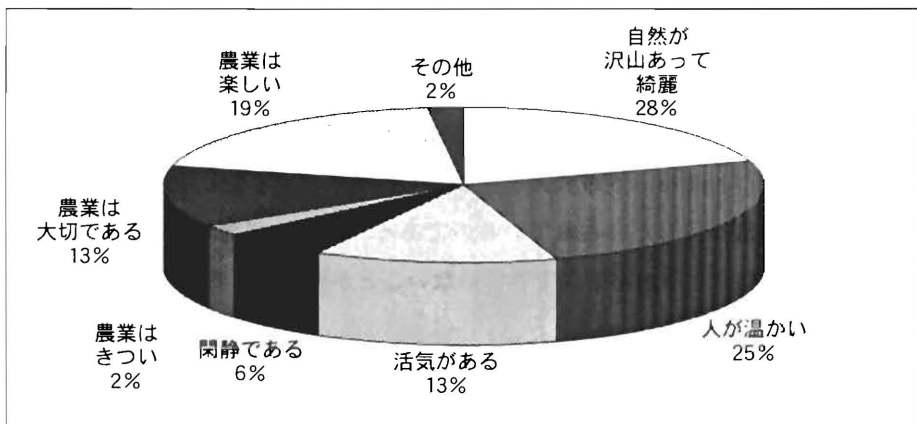


図3. 青森に行った後の農業・農村に対するイメージ（複数回答）

図2と図3から、グリーンツーリズムを体験してからは農村に対するプラスイメージが増加し、マイナスイメージが減少していることがわかる。

「農村にまた来たいか」という問いに対しては「絶対来たい」「来てみたい」という積極的な

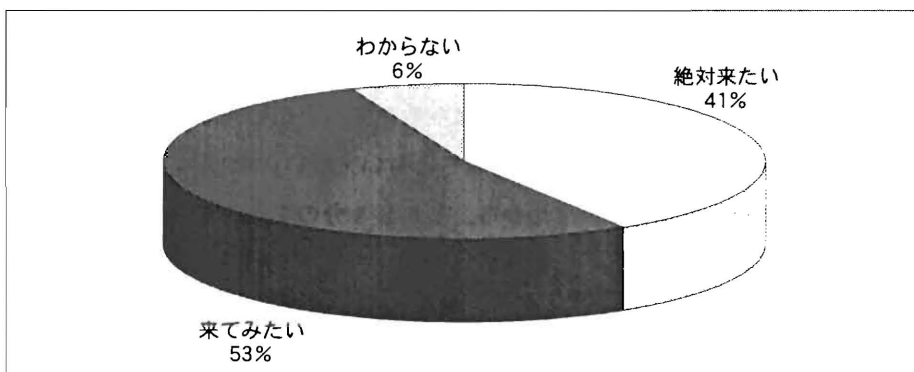


図4. 農村にまた来たいか

回答が多く、「来たくない」という回答はゼロであった（図4）。最初はそれほど期待していなかったグリーンツーリズムだったようだが、体験してみると強く印象に残ったようである。

4) 地域の住民の意識

尾上中学校の生徒と家族を対象に実施したアンケート調査から住民のグリーンツーリズムに対する意識、地域の活性化に対する意識を考察したい。

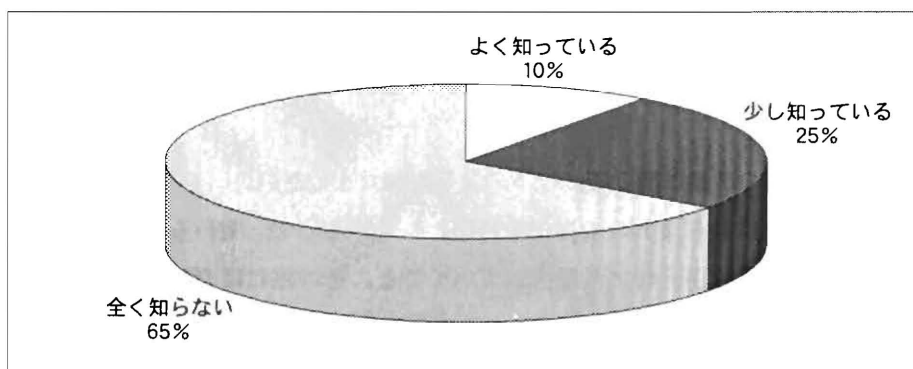


図5. 尾上町でグリーンツーリズムが行われていることを知っているか

この回答から、尾上町におけるグリーンツーリズムの知名度は非常に低いといえる（図5）。

続く「尾上町のグリーンツーリズムに興味がありますか？」という質問では、「とても興味がある」0%、「興味がある」22%、「あまり興味がない」47%、「まったく興味がない」31%という回答を得た。興味がないという回答が8割近くにのぼるが、知名度が低いことが要因として考えられる。

「都会の中学生が尾上町で農業体験・農家民泊をすることをどう思いますか？」という質問では、「とてもよいことだ」32%、「よいことだ」34%、「あまりよいことではない」6%、「まったくよいことではない」2%、「わからない」26%という結果であった。比較的肯定的な意見が

多くみられる。しかし次の「自分のうちで受け入れたいか？」という質問では受け入れに消極的になる実態が読み取れる。

最後に「グリーンツーリズムによって尾上町は活性化すると思いますか？」という質問では、「思う」が25%、「思わない」が32%、「どちらともいえない」が15%、「わからない」が26%であり、全体的には期待が薄いことがわかる。しかし4分の1はグリーンツーリズムが活性化につながるととらえている。

VI. まとめと提言

今まで述べてきたことから、次の4つのことが言える。

1. 尾上町のグリーンツーリズムは、地元の住民には知られていないが実際に体験に訪れた人の大部分が良い思い出を残して帰っている。
2. グリーンツーリズム事業の主体であるNPO法人尾上町蔵保存利活用促進会の財源は、残念ながら外部の助成制度からもたらされている。しかし、今以上の活動をしようと思うと資金は不足している。
3. 住民はそれほど積極的にグリーンツーリズムに関わりたいとは思っていないが、都市部の人との交流を望んでいるし、都市部の人に農村・農業について知ってほしいと思っている。グリーンツーリズムによる地域の活性化に期待する人も少なからずいる。
4. 農家以外の職業の人も取り込んでより多面的な事業を展開していくことで、地元密着型の活動を展開できる。

これを受けて、今後の活動に向けて、以下のような提言をしたい。

- ①グリーンツーリズムは農村全体の活性化を目的としているので、関わるのは農家でなくてもよい。そこで農家・非農家が一緒に活動をしていくこと。その際には農業を知らない非農家の意見にも耳を傾けることですこしでも都会の人の感覚を知ることができるかもしれない。
- ②都会の人に田舎のよさ、農業の大切さを知ってほしいという願望を持つ人は多いようなのだが、積極的に関わろうとする態度が表れていない。人に伝えるにはまず自分がその素晴らしさを知っている必要があるので、あえて地元の住民もグリーンツーリズムを体験する。
- ③グリーンツーリズムの知名度が低いことが大きな落とし穴である。広報活動、啓蒙活動を進めるためには資金が必要なので、寄付金を広く呼びかける。行政から金銭的なバックアップは期待できないが、町の広報に広告を掲載させてもらうなどのタイアップは考えたい。
- ④トータルで尾上町の景観を保全するためにはNPOが生け垣の保護にも携わったほうがよいのではないか。

さまざまな課題は山積しているが、今後も草の根の力でひとつずつ乗り越えていき、地域住民の理解を得ながら幅広い活動を展開してほしい。

(注) 弘前, 尾上, 岩木, 平賀, 浪岡の市町のグリーンツーリズムに携わる組織の連合体で, 大人数の修学旅行の受け入れのときは各市町でなくほっとステイで受け入れ生徒を配分する。各市町の上にある組織ではなく, それぞれの中心にほっとステイが位置している。

アンケートにご協力くださった尾上中学校の皆様, ご家族の皆様, NPOの佐藤さん, ご指導いただきました地理学研究室の後藤先生, 小岩先生, 農学生命科学部の谷口先生には心より感謝いたします。

【参考文献】

筒井一伸 (1999) : 中国地方の過疎山村における一地域振興の実態分析ー内発的発展論におけるチェックポイントを用いてー人文地理51-1, 87-103.

保母武彦 (1996) : 『内発的発展と日本の農山村』 岩波書店

NPO法人尾上町蔵保存利活用促進会 (2002) : 『蔵マップ』

企画集団プリズム (2005) : 『隔月刊 あおもり草子 尾上 庭自慢』